

チュニー
『春姫という名前の赤ちゃん』

ピョン・キジャ／文 チョン・スンガク／絵
童心社（2017年）

岡山県に引っ越しをした小学3年生の由美ちゃん。通学路の坂の中ほどに住んでいるおばあさんはいつも同じ歌を歌っています。歌を通して二人は仲良くなりました。おばあさんにはもうすぐ43歳になる春姫という名前の赤ちゃんがいます。春姫はおばあさんのおなかにいるときに広島で原爆の光を受け、大きくなれないのです。そんな春姫はある日入院することになりました。由美ちゃんはお見舞いのために友達とおばあさんがよく歌う歌を笛でふいてあげることにします。

『フジコ・ヘミング14歳の夏休み絵日記』

フジコ・ヘミング／著 暮しの手帖社（2018年）

終戦の次の夏休み、フジコは青山学院高等女学部2年生でした。学校教育のすぐ答えを出せというやり方は苦手だが、私はバカじゃない。それを見せたくて宿題でもないのに描いたのが、この絵日記です。戦争中はハーフというだけで「敵国人」と思われ配給をもらえなかったり、小学生であっても石をぶつけられたりとたくさんつらい思いをしました。新しい時代が始まり、毎日の生活の中で



幸せは自分の範囲内で作って行く。それが彼女の幸せへの第一歩でした。

『見上げた空は青かった』

小手鞠 るい／著 講談社（2017年）

ドイツで暮らしているユダヤ人の女の子・ノエミ。日本で学童疎開をしている少年・風太。遠いところに住む2人は会うこともないはずですが、しかし2人には共通点があります。2人とも妹がいて、2人とも絵本にでてくるうさぎのミミちゃんをモチーフにしたぬいぐるみを心の拠り所よ どころにしています。まだ子どもの2人には戦争という大きな力あらがに抗うこともできません。戦争が続くにつれ2人の状況はどんどん悪くなっていきます。はたして2人は無事生き残れるのでしょうか？



『ひでちゃんと呼ばないで』

おぼ まこと／著 小峰書店（2003年）

台湾の小さな町・和美わひに住んでいる日本人のすすむは、お父さんが台湾人でお母さんが日本人の、ひでちゃんという女の子と出会います。戦争のさなかでしたが、つかのまの穏やかな時間でふたりは一緒に花火をしたり、ひでちゃんのおじいちゃんおじいちゃんの家に遊びに行ったりして、とても仲良くなります。しかし、ついに和美にも爆弾が落ちるようになり、たくさんの人が死んでしまいました。そして戦争が終わると、戦争に負けた日本人は台湾を出ていかなければならなくなったのです。



『花や咲く咲く』

あさの あつこ／著
実業之日本社（2013年）



昭和十八年の夏。学校でも家庭でもモンペ以外の服は禁止されました。しかし、三芙美みふみはおしゃれが大好きで、モンペじゃない普通の洋服が着たいとひっそりと願っていました。そんな中、三芙美の家族は、以前お世話をした男性から闇物資の食料と服地をもらうことができました。三芙美は幼馴染おきななしみの和子、則子、詠子と一緒に洋服を作りはじめます。戦時中でも頑張っで日常を保とうとした少女たちのお話です。

『なぜ、おきたのか ホロコーストのはなし』

クライヴ・A・ロートン／著 大塚 信／訳
石岡 史子／訳 岩崎書店（2000年）

「第二次世界大戦」「ドイツ」「ユダヤ人虐殺」という単語を知っている人は多いでしょう。どんなことがあったのか、少くくは知っているかもしれませんが。この本には、人の死んだ姿や、ひどい拷問など、見たくない、考えたくないことばかり載っています。この本の表紙には「歴史の教訓を学ばぬものはふたたび過ちをくりかえすだろう」と書かれています。見たくなくても、考えたくなくても、戦争に関する本を茶化さずに読んでください。